「対話と実行」座談会（H20.9.6(土)　黒潮町）の概要

●知事あいさつ

高知県の財政（平成20年度）のパンフレット及び「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」（以下のＵＲＬ参照）を基に説明。

（http://www.pref.kochi.jp/~zaisei/joukyou/pamphlet/H20zaisei.pdf
http://www.kochinet.ed.jp/kinnkyuupuranngaiyou.pdf）

●座談会

【耕作放棄地の再生、加工場の必要性、農薬許可の全国的な統一、役職への女性登用、特産品の加工や販路についての県の支援、農業振興センターと地域支援企画員制度の維持】

Ａさん：職業は農業です。野菜を作ったり、ハウスをしてきた。今日のパンフレットの中に私の言いたいことは出ているが、自分たちが豊かになることを考えてみたので、聞いていただきたい。

今どこも同じだが、中山間の田畑は、耕作放棄地が非常に増えている。農家の高齢化と鳥獣被害が主な原因かと思われる。この耕作放棄地を何かの方法で蘇らせることはできないだろうか。女性や高齢者が知恵や力を出し合って安全・安心な作物を作れればと思うが、個人の力ではとても及ばない状態になっており、行政の支援やアドバイスを仰ぎたい。荒れた田畑が蘇ったとき、人も元気をもらえる。農作物ができたら、それからが女性や高齢者の出番で、直接販売をするのもよく、１次加工、２次加工で付加価値をつけることもよいと思う。それには一農家では無理で、誰でも使用できる加工場が必要である。一人一人が保健所の許可を受けて作るよりも、合同加工場であれば交流の場ともなり、忘れられていく文化の伝承にもなる。心も懐も豊かになり、医療費も軽減され、町も豊かになるし、県も国も元気になる。

作物を作るには最低限の農薬も必要であるので、次は農薬問題についてお聞きしたい。登録を取るには、知事の認定が必要と聞いたが、一例をとると、トマトには消毒をしてもよいが、ミニトマトにはだめ、結球ハクサイにはしてもいいがチリメンハクサイやレタスにはだめ、愛媛県ではよいが高知県はだめ、そうではなく、全国的に統一された許可をしてほしいと思う。

役職への女性の登用について、このたび、幡多農業振興センターに女性の所長さんが来られた。今までで初めてのことで、私たちは本当にうれしく思っている。幡多地区には現在７名の女性農業委員が活躍している。将来は委員の半数とはいかなくても、せめて３分の１の女性委員の誕生を望んでいる。なぜなら農家人数の半数以上は女性が占めているからである。

次に、黒潮町の特産として、町では約70アールの原野に近い荒れ畑を開墾してサトウキビを作っている。一部は４年目を迎えた。すべて70歳以上の高齢者で作業している。砂糖の加工や販路についても、県のご支援をお願いしたい。振興センターはもちろん、県の地域づくり支援課の方にはいつもお世話になっている。この制度をなくさないようによろしくお願いしたい。

知事：まず、制度の話で、地域支援企画員の制度や農業振興センターは、私も非常に有意義な制度だと思っている。地域支援企画員は、橋本前知事が作られた制度だが、地域地域との関わりをしっかりとし、また、地域の取り組みをバックアップするという観点から、総括地域支援企

画員という制度を設けたり、組織化をしたりという形で、私はむしろ強化している。ご紹介するが、３名、中西総括地域支援企画員、岡田地域支援企画員、岡村地域支援企画員で、黒潮町で皆様と共にいろんなお取り組みについて汗をかかせていただきたいと思っているので、よろしくお願いしたい。幡多農業振興センターの所長は大川で、よろしくお願いしたい。

耕作放棄地の問題では、公的な支援が必要だと思っている。中山間地域等直接支払制度という制度もある。こういう制度を今後もずっと続けていくということが、本県などにも大切なことだろうと考えている。その上で、より前向きな施策として、中山間地域で農家が所得を得て暮らせるような農業をどのように作りあげていくのかということが大きなポイントだと思う。中山間地域では、まず耕作地が非常に狭いということがある。そこでどのようにやっていくか、１点目は、ヘクタール当たり、アール当たりの収量を上げていく、２点目は、付加価値の高い作物をいかに作っていくかということである。狭い土地ながら、収量も上げ、かつ、付加価値が高いというものを目指して取り組んでいかなくてはならないと思う。産地ごとに、適した作物が何かをしっかりと見極め、そのような作物を輪作していける、年間に何回か収穫の時期がやってくるといった農作地づくりが必要ではないかと考えている。その上でさらに言えば、集約・集荷して流通販売ルートに乗せていくということが非常に大変であるので、できるだけ、集約化、一元化していくという方向性が重要だと思っている。「高知型集落営農」ということで、今、このような中山間の農地づくりに努めようとしている。まだ全県内に広がる取り組みではないが、こういう制度を使っていきながら、耕作放棄地が生じやすい中山間地域においても、農家、農地の振興を図るべく努力をしなければならないと考えている。

次に、１次加工、２次加工ができる、誰でも使用できる加工場が必要だという話だったが、食品加工の分野は、典型的に取り組んでいく余地のある分野だと思っている。食品加工とまでいかなくても、１次加工を少し施す、さばいておく、魚の内臓を取っておくだけで、例えば外食産業さんとも取引ができるようになる事例も多々あると聞いたことがある。ただ、そのためには、在庫がしっかり揃うようにしておかなければいけない、そのためには、例えば冷凍施設が必要だとかいうことはあるのだろうと考えている。先ほど地域のアクションプランという話を申し上げたが、地域でのいろいろなお取り組みの中で必要だと思われることについては、このような施設整備についてもやっていかなければならないと思っている。ただ、残念ながら、予算の制約がある。そして、施設を作ったはいいが、失敗作、売れないものばかりできてしまって、結局使われない施設だけが残ってしまうということであってもいけない。川上から川下までの総合的・一体的な支援策を考えていく中で、この施設整備は行っていくべきだと思う。加工という観点で、例えば、地元の木で作ったおもちゃがあるが、売れるだろうかと聞かれることがある。これは残念ながら生産者の都合に立った話であって、消費者側から見れば、原産地がどこであるかは基本的には関係ない。消費者側から見て、魅力的な商品であるかという視点で、企画段階からしっかりと練り上げていくということが重要だと思う。そして、もう一つ、販路の確保が個人個人の方には非常に大変な部分が多いと思う。都会などに売り込みをかけていく場合に、スタートの段階で、公がもう少し仕事をすることができないかと考えている。高知県の首都圏のアンテナショップにおける入り込み客数が、他県に比べて極めて少ないということが分かっている。これは一例なので、アンテナショップだけでやろうというわけではないが、北海道や沖縄のアンテナショップには、年間 200 万人のお客さんが来るそうである。高知

県のアンテナショップには、残念ながら多く見積もっても 11 万人ぐらいしか来ていない。愛媛と香川が一緒に出しているアンテナショップには 46 万人来ているそうである。アンテナショップのことなども含めて、販路の確保について、研究を重ねなければいけないと思っている。そのように両面から見ていって、これならばいけるだろうという加工品などが出てきて、ボトルネックになっている部分が出てくれば、施設整備ということも考えていく必要があると考えている。

役職への女性登用は、できるだけ進めていくべく努力をするが、その年齢構成で適任者がいるかどうかという問題もあろうかと思う。農業委員さんの話は、必ずしも３分の１は女性とまでは決めきれないが、女性の皆さんにお願いすることについて意を配していきたいと思う。

農薬の基準が全国的に統一できないかという話であるが、基本的には農薬の製造会社が許可を取っているので、全国的に統一基準ではないかと思う。これはだめで、あれはよいというのは、県の指導ということですか？

Ａさん：あまり詳しいことは分からないが、そういうことをよく聞く。

知事：また詳しく調べて、お答えしたいと思う。本県では、先ほど付加価値ということを申し上げたが、できる限り農薬を使わない農業を目指すべきではないか、なぜかというと、それは付加価値があるからである。今、ＩＰＭ技術を使った減農薬の野菜づくりをしているが、そのゆえに安全・安心で、健康的な野菜として、付加価値がついて売りやすくなっている。さらに、10 年後 20 年後をみて、全く農薬を使わない有機や無農薬についても、将来のスターとして育てていかなければならないと思っている。このような分野についてはむしろ、他県よりは厳しくていいのではないかと思っているが、もちろん農家の経営が成り立つということが大事なので、そこのバランスはあると思う。

【高知県の教育】

Ｂさん：８月 30 日に四万十市立文化センターで、ＪＣ（青年会議所）さんの第 51 回高知グループ会員大会記念事業で、「あなたが主役の教育シンポジウム」の講演会を聞かせていただいた。そのときのことも含め、土佐の教育改革について話をさせていただきたいと思う。平成 16 年１月 24 日に追手前高校において、「土佐の教育改革」というシンポジウムがあった。そして２回目が 10 月 30 日にあって、このフォーラムは３回やったのではないかと思う。そして、こちら（幡多地域）においても 19 年２月 10 日に四万十市立文化センターであった。第１のフォーラムとして高知県大崎教育長、第２は実践事例発表、これは中村市立中村南小学校、高知市立朝倉中学校、そして休憩の後にいよいよディスカッションということになった。そのテーマとして、「子どもたちが主人公　土佐の教育改革フォーラム　子どもたちの基礎学力の定着にどう取り組むか」ということで、ちょっと読ませていただくが、「高知県教育委員会と県内の５つの教職員団体が初めて共に協力し、教育改革のフォーラムを実施することになりました。今まで意見が異なることも多かった県の教育委員会と教職員の各団体が、「子どもたちが主人公」を合い言葉に一同に集まり、知恵を出し合います。この新しい第一歩に県民の皆さんの参加をぜひお待ちします」ということで始まった。先にあった大崎教育長の講演の中に、「高校にひらがなの

書けない生徒が入ってくるという話を聞いたことがある」とあった。それに対して、「そんなことはない」、「私たちの小学校、中学校ではそれぐらいは教えている」、「みんな理解している」という反論が出ると思っていたが、どのパネリストからもそういう反論は出なかったと思う。そういうことで、その後、どういう指導方法になっているか。高知の教育の未来は明るいものか、知事さんにお聞きしたいと思う。

知事：高知県の教育の未来を明るくしなければならないと思っているが、現状は非常に厳しいというのは間違いないところである。土佐の教育改革を 10 年間やってきた。その結果がこういう結果だったのではないかと言われたりもするが、他方で私は土佐の教育改革をやってきたことによって、県の教育長と県の教職員の皆さんがフォーラムを行って対話をするような関係ができてきたとか、基礎学力が課題だということになれば一緒にその問題に取り組もうではないかという気運が出てきたとかということで、大きく環境が変わりつつあると認識している。子どもが主役である、子どものためにということが第一であると考えたとき、この基礎学力があまりにも不平等になっているという状況に、真摯に取り組んでいく必要があると考えている。大切なことは、学校現場が変わる、先生も変わる、子どもたちの授業態度も変わる、放課後が具体的に変わる、子どもたちの生活が具体的に変わる、ということだと思う。口先だけの理念を言って、それが現場に浸透しないということではいけない。基礎的な問題、ひらがなもできないのかという話がある。前教育長の話の中に、量から質への転換が必要だというお話があった。いわゆる補習をやるよりもその授業の質を上げていくことが大事だということである。しかし、量か質かという二元論的な考え方はよくないのではないかと私は思っている。補習も必要なことはある。基礎的な問題は反復練習をするからできるようになるということだってある。なので、量か質かということではないと思う。いろいろなことについて、予断を排して取り組んでいくということが重要だと思っている。

Ｂさん：フォーラムでやんちゃ和尚の廣中先生も言われていたが、会場に、行政を含めた教育関係者が来ていないのではないかということを私も思った。そういうことも（高知県の学力が低いことに）関係があるのではないか。

知事：若いＪＣの皆さんが教育問題についてシンポジウムやろうということをおっしゃること自体がよいことだと思う。（関係者は）来ておられたように私は思った。

【国道 56 号改良工事の早期完成】

Ｃさん：黒潮町の芝地区に住むＣです。私は、国道 56 号改良事業の運動に 10 年前から頑張ってきた。10 年くらい前に事業化になり、道路もすぐにできるなと思っていたところ、途中で反対者の声が強くなり、事業はそのままで、今でもまだどうなるか分からない状態になっている。私たちは安全な道をということで、本当に一生懸命になって取り組んできた。町長の方にも何度かグループで足を運び、お願いに行った。反対者の意見も強く、また、弁護士までの問題になったということで、なかなか動きが取れにくいという状態もあった。国交省からも、この 10 年で、何度となく地域での説明会があった。その中で本当に印象に残っていることが一つある。

最近のことで、芝地区の説明会のときだが、住民の方が「もう同じことの繰り返しで、一体道路はできるのか、できないのか。もうこんな説明は聞き飽きた」と言って、途中で退場された。町長もこの道路に一生懸命取り組んでいただき、６月には、高松の国交省（四国地方整備局）にも各地区の区長さんを始め、今日おいでておられる山本広明県議、そして、県の方と要望に行った。そのときに、初めて地域の住民、私たち３名の女性を一緒に連れていってくれ、生の住民の声を国交省の方に伝えることもできた。初めて、運動に実りが入ったかなという感じがした。知事さんも、文書ではこの 56 号改良事業のことは十分に理解されていると思うが、地域の声というものは文書には入ってないと思う。今日初めてとなるが、知事さんに私たち地域の思いを知っていただきたい。この間は梼原に行った。梼原と言えば、知事さんもご存じだろうが、私たちと同じような道路が８月に落成された。私たちは、そのことを知り、梼原まで庁舎と道路を見学に行った。そうすると、たまたまその庁舎で会があったようで、町長と山本有二先生にお会いした。先生には「是非大方の道路を着工になるように頑張ってください」とお願いした。その後に、知事さんもご存じだと思うが、梼原の道路の運動で頑張っておられた方を訪ね、知事さんと一緒に横断幕を持って帯屋町を歩いている写真を見せていただいた。東京にも行ったそうである。その方に、「知事さんに会ったことがある？」と聞かれ、「私たちは町長のところに行くのが精一杯で、知事さんには会っていない」と言うと、「一度知事さんに会ってみなさい。きっとあなたたちの話は十分に聞いてくれる」と励まされ、今回この「対話と実行」座談会のチラシを見て、「知事さんに、私たちの 10 年の思いを聞いてもらいたい」と思った。山本有二さんには、７月の終わりごろに黒潮町に立ち寄っていただき、そのときに 40 名あまりの地域の住民の声を聞いていただいた。そのときに、85 歳のおばあさんから「私の友だちは、この道路で２人交通事故で亡くした。こんな寂しいことはない」という訴えもあり、胸を打たれた。この国道、私たちの生活の道路は、通過道路であって、大きなトラックなどが通り、お年寄りや障害者は通ることが本当に難しい道路である。道路に関係している地権者の方からは「道路を作ってください。私たちの土地は提供します」という同意書も既に取りながら、何年も待たされている。その間に田畑は草が生え、作物も作れず、そのままの状態である。そういう私たち住民の思いを、知事さんに是非分かってほしい。田ノ口から早咲の間のこんな危ない道路を早くなくし、是非新しくしてほしいと切にお願いする。

知事：熱いお気持ちが伝わってきたと思う。こういうお話は地域のエゴではない。都会では当たり前に整備されていることができていないわけである。やらなければならないと思うので、一生懸命戦っていきたい。仕事を作るためだけに公共工事をやるというのはいけないが、必要なやるべきことについてはしっかりとやっていくべきだと私は思っている。正直なところ、高知県などの道路の必要性は、分かってもらいにくいところがあると思っている。高知県は、人口が少なく、そして段々減っている。道路整備の効果は、例えば、A地点とB地点の道路を整備することによって、10 分早く着くようになるとすると、その 10 分×通っている人の数で効果が計られる。こういう方法だけで計算されると、高知県は不利である。だが、本県の場合には、東西の基幹道路が唯一一本しかないという脆弱性があるし、年間の通行止め時間は 15,000 時間、１日当たり 41 時間に上る。道路を整備することによって、そのような通行止めなどが解消される効果や、救急車が通れるようになる、子どもたちの安全・安心が守れる、高齢者の皆さんの

病院に行く時間が早くなるといったような、命の道に関わるような視点をしっかりと訴えていく必要があると考えている。東京事務所も抜本的に体制を強化したし、人事配置にも配慮して、全国的な視点から道路整備の必要性を考えていけるスタッフも集めつつあるつもりである。そういう県のスタッフも活用して、一生懸命取り組んでいきたいと思っている。土佐はちきん連合の皆さんには、この間東京に行っていただいて、命の道の要素を訴えてくださったそうだが、説明しておられると涙を流されるくらいで、本当に切実な問題だと思っている。私が財務省にいたときには、無駄だと思えるような公共事業もあったが、本県などの道路については、自信を持って整備を進めないといけないと思っている。共に頑張ってまいりましょう。

【県道大方大正線の改良】

Dさん：先ほどのCさんは国道のバイパスのことを訴えておられたが、過疎地域に住む一地域住民として、地域の道路のことについてお願いをしたい。資料を作ってきているのでお配りしていただきたい。この資料のマルの円形の中に私たちの集落がある。上川口から入ったところに蜷川（みながわ）の集落がある。現在蜷川まで道路整備をしていただいているが、これから仲分川（なかぶこう）、また、伴太郎（ばんだろう）に行くと、伴太郎から奥は全く行き止まりで、道がない。山を一山越えれば、旧大正町の打井川（うついがわ）というところに出る。そして、仲分川から入って、仏ヶ森という国有地があるが、国有地の中に、本当にうねうねとくねった県道（大方大正線）があって、大変道が悪い。こうして、仲分川のところ、伴太郎から南側の蜷川の下村町長宅までが、時間雨量 50㎜、あるいは連続降雨があるとストップをかけられる。そうすると全く孤立の集落になってしまう。ここを1.5車線化にということには、山本先生が昔から骨を折ってくれていて、私たちが陳情に行っても一緒になってお願いをしていただいているが、なかなか「うん」と言っていただけない。是非ともやっていただきたい。予算がない、また、いろんな点でやりたくてもできないという答えが返ってくるかもしれないが、蜷川から仲分川、伴太郎に至るこの線について、カーブの切り取りを年に数か所でもやっていただければと思う。今は、救急車、緊急車両も、20㎞/h程度でしか走れない道路であるので、お願いしたい。

知事：パンフレットの１ページ、２の(２)のところに1.5車線的道路整備事業は５％の増ということで、今年は予算は大幅に増やしている。道路については、まず、国道56号のような大幹線の問題がある。これは、多くの地域、県民全体に関わる話であるので、加速していかないといけない。そして、山に上がっていくようなこういう道路、1.5 車線的整備が必要なものがたくさんあると思っている。救急車の話については言うまでもなく、また、観光で売るにしても、大型バスが通れないというところがいくつかある。予算を５％増やしているが、大変恐縮ながら、こういうお話を県内でたくさんいただいている。どうしても優先順位というのをつけてやっていかざるを得ないところがあって、既に事業に着手していて、もうすぐ完成するところであるとか、経済効果とか、複数の効果も併せて見込まれるところであるとか、そういう点を見極めて優先順位をつけていっているところである。おっしゃっている箇所は蜷川から北に行って、どちらにいったところですか。西側の方はゆっくりだが、1.5 車線の整備をしているようであるが。

Ｄさん：していないです。

知事：（おっしゃっているのは）東側の方ですね。西側は1.5車線をやっているようである。

Ｄさん：蜷川までは２車線となっている。伴太郎というところから、点線で、奥打井川というところまで書いているが、ここにトンネルを造ってくだされば、左に書いているように、これだけの経済効果（木材輸送に便利となり、林業の発展、集落の活性化に寄与する）がある。

知事：基幹道路の話ははっきりしていて、国道55号や56号をやっていかなければならないのは当然であるが、おっしゃるような上に上がっていく道路については、いろいろと優先順位があるということで、ご容赦願いたいと思う。トンネルについては、新しい大規模なトンネルは難しいと思う。県内で５～６本、大型のトンネルをという話をいただいているが、24 年度、25年度の財政状況にメドをつけていく必要もあり、今の状況では難しいという話をさせていただいている。1.5 車線などについては、県内で優先順位はつけさせていただくが、できる限り進めていきたいと思う。

Ｄさん：トンネルはおそらく私が生きている間にはできないと思う。なので、まず、カーブの切り取りだけはお願いしたい。それによりスムーズに走れる道になると思う。

【農業の後継者対策、少子化対策】

Ｅさん：２点、質問いたしたい。私は中学時代からずっと農業をしているが、ここ何年かで、外国からすべての農作物が日本に入って、日本の農業は深刻な状態になっている。休耕田の方が耕作面積よりも上回っているような状態で、それでは後継者にバトンタッチといっても難しい。高知県だけでも、後継者に何とかバトンタッチできるような農業政策を考えていただけないか。

もう一つ、私たちが小学生になった当時は、生徒数が380人いた。ところが現在は、１年生から６年生までで46人しかいない。平成40年くらいには、子どもの数がどれくらいになるだろうかと思って心配しているが、知事さんはこの子育ての件についてどのようなお考えを持たれているか。

知事：輸入によって本当に深刻だということは、おっしゃるとおりだと思う。林業についてもそうだと思う。地産地消、地産外消、そして国産国消、国内農産物をしっかりと国内で消費していこうという動きを農水省も強化をしてきているし、私も大いに賛成である。そういうことによって、国内農産物に対する需要を国内で増やしていく、これは輸入品の生産履歴がはっきりしないことによって、安全性についての疑念が世の中に広まってきたという大きな背景があると思う。安全・安心で健康に良い国産の食べ物を、国内で消費していく取り組みを一生懸命していきたいと思う。

後継者問題は、正攻法でいけば、第一に、農家が所得をきちんと得られてごはんが食べられるという体制をつくっていくことが重要だと思う。農業だけではなく、自伐での林業をやった

り、併せて少し商売も営まれたりという全体をやっていかれる中で、中山間地でも暮らしていける地域づくりを目指したいと思っている。大規模な施設園芸をやっているところと、非常に小規模なところで、いろいろ違いはあるだろうが、先ほども申し上げたが、ヘクタール当たりの収量を上げることと、付加価値を付けた商品を作ること、そしてその作ったものについては、まとまりをもって販売をし、競争力を確保するとか、もう一つは年間を通した輪作をできるようにするとか、そういう取り組みによって、農家の、地域の皆さんの所得を確保することが、後継者確保の第一だろうと思う。さらに、その生産地のそばで、食品加工などがしっかり栄えていくことによって、少なくとも近くには住めるようにするといったことがあるのではないかと思う。それを第一とした上で、もう一つは、子どもたちに１次産業の魅力を分かってもらうということがあると思う。今年から、子どもたちに農林水産業の体験などをする機会を増やすこととしている。高知のそういう産業の魅力を分かってもらいたいということからである。中山間で、林業や農業が中心のところでは、必ず若い人の人口が減るかと言えば、そんなことはない。なぜかと言うと、高知県で増えているところがあるからである。15 歳から 24 歳の人口がこの 10 年間で増えたところとして、馬路村がある。ユズの加工を行ったり、全国的に売り出していったり、木で作ったモナッカというカバンもアメリカで毎年 400 個売れているそうである。サミットでもこの間使われることとなった。こういういろんな取り組みを活き活きとやっているところには、県外からも若い人がやってくるそうである。３番目に、農業の後継者の確保という観点からいったとき、業種によっては、人手が余っている業種も高知県にあると思う。一方で、１次産業、農業、林業、漁業などはどちらかと言うと人手が足りない分野だろうと思う。しかし、突然業種転換をされようとしても、そんなに簡単にはできない。農業にはまず土地が必要であるし、さらに高知県でやっている農業には高度な技術が必要なものもある。黒潮町でお伺いした話だと思うが、移住者の方に対してみんなで農業技術などを教えておられるという話があったと思う。このような形で、周りの人が、地域に残ろうとする若い人や、業種転換しようとする人などを適正にサポートして教えてあげられるような体制づくりも重要ではないかと思っている。いろいろなアイデアがあると思う。これは全く私個人のアイデアの段階の話だが、農業生産法人みたいな法人形態で、まず、被用者として、雇われ人として入って農業を始め、その後自立・独立していくという形もあるのかもしれない。とにかく、いろいろな組み合わせで、１次産業における後継者の確保に努める必要があると考えている。

子育て支援は、ものすごく大切だと思う。今日の資料の中に子育て支援の話については、あまりはっきり書かせていただいていないかもしれないが、共働き世帯で、働きながらお母さんが子どもを育てられる体制づくりを目指していかなければならないと思っている。教育改革として先ほど申し上げたが、放課後に子どもを預かる場とか、子どもたちを少しでも長く預かって教育も施す場、「幼児教育改革」、「放課後改革」は、直接的に子育て支援につながるものだと考えている。また、若いお母さんは、初めて子育てをされるに当たって非常に悩みが多い。さらに、核家族化が進んでいるということで、苦しまれている方も多いと思う。そういう親御さんたちをバックアップしていくような体制、親育ち支援制度といったことも行っている。昨日、四万十市に行ったときに素晴らしいお話を伺ったが、子育て中のママさんたちがサークルを作っておられるそうである。お母さん同士で交流ができて、かつ、子ども同士が遊べる場を作っておられる。そういう取り組みは一つのヒントかなと思う。地域性があるのかもしれないが、

そういうことも研究をする必要があるかなと思う。

～休憩～

【国道 56 号改良工事の早期完成】

Ｆさん：入野地区の芝に住んでいるＦです。住民との対話を実施されるのは初めてのことだと思う。今からの県政に大いに期待が持てるのと同時に感謝している。

先ほどＣさんからも要望があった国道 56 号改良事業についての話である。入野地区を通る 3.4㎞の国道 56 号は１日で約 15,000 台の車が通過している。道路の幅は約 7.7mほどしかない。また、ほとんどの区間には歩道がない。子どもたち、高齢者、障害を持つ電動車イスの人たちが安心して通れる道、すなわち、歩道のついた道路を造ってほしいと願う住民の必死な思いから、平成 12 年にこの活動が始まった。知事さんのお手元に資料があると思う。子どもたちの通学の写真、クレーン車が突っ込んだことがある部分の写真、電動車イスの方が段差がある部分を通行する写真、主婦が車の中を縫うようにして自転車で買い物に行く写真である。交通量の増大に伴って、毎年のように交通事故が多発して、１年に 10～15 件くらいの事故数になっている。過去９年間に、早咲から下田ノ口の間、3.4㎞ の間で、８人の大切な命が失われた。当時の故中川町長、前金子町長、現下村町長、３代の町長さんと、担当課の職員の方々、県議の山本先生、各方面の方の必死の取り組みにより、様々な弊害もあったが、今まで乗り越えながらここまで前向きに進んでこられたと思っている。平成 10 年 10 月には、国道 56 号改良事業に関する要望の 11,305 名の署名が当時の建設省に提出された。今年の６月 11 日には、高松の国土交通省（四国地方整備局）に地域住民の声をと、町政の方々とともに参加させていただき、この道路の危険さを訴えてきた。７月 20 日には山本有二（衆議院議員）さんに、住民の皆さんとともに一生懸命お願いしてきた。この活動を始めてから 10 年の歳月が経ち、活動の火も途中で弱まりかけたが、佐賀町との合併があり、佐賀の議員さんたちにも元気をいただいた。私はこの現状を知事さんにどうしても知っていただきたかった。この道は、住民の悲願、西南地域の悲願であるので、１日でも早く道路ができるように、高知県のご支援を心からお願いします。最後になるが、昨日主人が一言ぽつりと言った言葉がある、「明日は知事さんに道のことで話を聞いてもらう」と言うと、「自分はできあがった道路を見たい。幅の広い歩道を電動車イスで１回でも通ってから死にたい。自分にはあまり時間がないから早くつけてほしい」との心からの言葉に私は胸が熱くなった。知事さん、ご協力をお願いします。

知事：写真を見せていただき、そのとおりだと思うので、頑張っていきたいと思う。どうやってこの切実さを分からせていくか、訴え方のいろいろな工夫があると思っている。生の切実な声を届けるとともに、もう一方で、数学の世界を使って（数字によって）、この効果を訴えていくということも必要になってくる。もう一つ、訴えるに当たって非常に重要なこととして、国政と県政と市町村政が一体となって取り組んでいくということも極めて重要だと考えている。私が財務省にいて予算をやっていたときに、こういう話を、各県の地方地方からいただいた経験がある。本当に熱心にやっておられるようなところは、連携がきちんとできていたと思う。一体となって言っていく、逆に言うと、そういう事業はやれば効果が出るだろう、うまくいくだ

ろうと、そして、やろうとする方も確信できるところがあると思っている。私の県政の基本中の基本は、「対話と実行」ということを申し上げたが、県政と市町村政との一体的な連携ということである。町が一生懸命進めようとしておられることを、県としても一生懸命バックアップしていくことが、県の役割だと思っている。町長さんとも、また、関係の先生方とも手を携え、実現するためにはどのように訴えれば効果的か、私も知恵を練っていきたいと思う。

【高知にUターンした感想、シルバー人材の活用、1.5 車線的道路整備のモデル地区となったことによる西部地域への恩恵、県からの天下りの必要性】

Gさん：私は平成３年に、35 年住んでいた東京からこちらの入野の早咲にUターンで帰ってきた。そのときに橋本大二郎さんが、全然親戚もない、何もないところへ、草の根で来られて、知事になるというのを聞いて、応援をした。尾﨑知事もUターンで帰られたということなので、Uターン知事として、一番今感じておられることをお聞かせ願いたいと思う。

昔は、東京から入野早咲まで、片道 32 時間かかったが、今は 12～15 時間くらいで車で帰れるようなところになった。それだけ道路も整備され、生活水準も上がって、今の生活に本当に満足している。「ああ、良かったなあ」と思うような毎日の生活をしている。私たちはもう 70 歳になるが、本当に元気な年寄りばかりである。これから、向こう三軒両隣、みんなが力を合わせて楽しく暮らしていくためには、このシルバーの人材を機能的に使っていただきたいと思う。収入がないと生活していけないので、シルバー人材の使い方を県で考えていただきたい。お医者さんも、退官された方をもう一度、腕は若い人以上にあるようなお医者さんが多分いっぱいいらっしゃると思うので、そういうお医者さんの使い方も考えるべきだと思う。また、先ほど馬路村のことが出たが、農業が本当に今大変である。重油が高くなって、燃料のためにやっているようなものだとよく聞くが、馬路村については、東京にいるときからえらいところだなあと思っていた。ユズ一つであれだけ大きくしてきた、高知県で一番モデルにしなくてはいけない、見習わなくてはいけないところだと思う。新聞で、馬路村も年寄りが多くなって、ユズの生産が追いつかないので、若い人が馬路村に移住して、一緒にユズを作るようにしていると見た。香川県では、オーストラリアの干ばつにより小麦粉がこないので、香川県産の小麦粉でうどんを作ろうとしていると聞いた。先ほどから出ている休耕田を活用して、また、シルバー人材を活かして、専門的な農家の人に聞きながら、元気な年寄りが休耕田を一生懸命、子どもたちのため、県や国のために作る、みんなが働けるような施策があったらいいなと思ったので、それを考えてみてほしい。

また、この間、新聞で、高知県は道路整備の 1.5 車線のモデル地区になったと見たが、西部地域には具体的などんな恩恵があるのか。

最後に、県からの天下りが 68%と、５日くらい前の新聞で見た。高知県にもまだ天下りという言葉があったのかなとびっくりしたが、必要であるのか質問したい。

知事：Uターンをしてきてどう思うかということだが、高知県の経済はここまで疲弊したかと、非常に悲しい気持ちである。象徴的には高知市の帯屋町だが、街並みがどんどん寂しくなっていくなと思った。選挙のときに久しぶりに土佐清水に行った。父が土佐清水であるが、竜串は、私が子どものころに海中展望塔とか海洋館とかができて、いろいろな店もでき、とても栄えて

いた。それが今や閑散としている。実感として、今の高知県は本当に活力が失われてしまったという思いで残念だと思っている。経済の指標を見たときに、何かにつけて 46 位であるが、そういうことにつながってきているのではないか。また、教育の問題でも、基礎学力が全国で 46 位で、不登校も全国で 46 位の悪い出現率である。非常に抱えている課題は大きいと考えている。ただ、先ほどおっしゃったように、他方で、相当強みを持っているなとも思っている。「住んでいて本当に良かったな」と思っているとおっしゃったが、本当に暮らしやすい県で、ある意味人間らしい暮らしのできる県だと思っている。美しい自然があって、全国でも一番として評価されたような素晴らしい食べ物もある県である。心のふるさとみたいなところだと思うが、こういう強みを、人々の雇用、収入につなげていく仕組みづくりをしたいと思っている。そうであってこそ、若い人も残れるような県になっていくのではないかと考えている。観光地を作ろう、観光を振興しようといって、ある県がやったように、海のそばにプールを作るということは絶対にやってはいけないと私は思う。自然の良さ、強みをそのまま活かしていくことが大切だと思っている。高知県の持っている強みは、時代の大きな流れに沿っている。2005 年から 2020 年にかけての 15 年間で、高齢者の方々の数が約４割増える、一方で、若い人の数は２割から３割減るということが予測されている。そういう時代において、自然志向で、食べ物がおいしい、健康にもいいという土地柄は、支持をいただけるのではないかと考えている。ただ、具体的な雇用、収入につなげる仕組みづくりが今まで十分できていたかという問題が一つと、もう一つはＰＲの観点、先ほど申し上げたアンテナショップを一つとっても、高知県のプレゼンスが非常に低くなっていたのではないかなと感じているので、対策を講じていきたいと思う。

シルバー人材を機能的に活用していくということは、高知県のみならず、全国的なキーだと思っているが、特に高齢化が全国に 10 年先行して進んでいる高知県などにおいては非常に重要なことだろうと思う。例えば、民生委員さん、児童委員さんの方々も、高齢化しておられるが、虐待事件などの反省も踏まえて、もっと連動をさせていただきたいというお話もさせていただいたところである。地域で、放課後の学びの場などを作っていくといったときにも、地域の住民の皆さんのご協力が不可欠である。若い人たちが昼間に外で働いている間、シルバー人材の皆さん方にいろいろとご協力を賜れば本当に大きいことだと思っている。今は 60 歳といってもものすごく若くて、地域によっては「60 歳で若手と言われる」という話を伺うが、本当にそのとおりだと思う。この間は老人クラブの方から「60 代の方と 80 代の方では 20 歳違うので、考えにも違いがあり、一つの課題である」と伺って、なるほどと思った。高齢者とひとくくりにするのがいけないのかもしれない。農業でも、先ほど休耕田対策についてお話をしたが、シルバーと言われる方々にも対応をしていくことが必要だと思う。お医者さんについて言うと、退官されたお医者さんにおいでいただくのも非常にありがたいことであるし、それも一つの手だと思うが、医師確保の問題については、本当にいろいろなことを試していかないといけないと思っている。全国的に今お医者さんが不足している。これに対しては、医学部の定員を増やすこととなって、10 年後にはある程度改善される予定であるが、10 年間はまだ今の現状が続く。

Ｇさん：お医者さんは少ないのではなく、給料がいい、待遇がいい方へ行くから、地方には少なくなったということではないのですか。

知事：詳しく申し上げると、一人当たりのお医者さんの数は、高知県は全国第３位である。医師の数は非常に多い県であるが、高知市、南国市周辺に多く、東部、西部においては、非常に少ない地域がある。また、産科、小児科、婦人科、麻酔科、脳神経外科といった科目の医師が少ない。全国的な傾向ではあるが、高知県はその傾向がより顕著である。もう一つ、一番深刻なのは、若いお医者さんの数がすごく減っているということである。救急医療、急性期医療を担いうる 40 歳未満のお医者さんの数の増減をこの８年間で見ると、全国は 97%でほぼ横ばい、東京は７％増えている、高知県は 20%減っている。この傾向がずっと続いていくと、高知県の救急医療は非常に厳しいことになる。今おっしゃったのは、自由に研修先を選べるようになった結果として、どんどん都会に行ったということである。これは、国全体で制度を見直さないといけない。臨床研修医のあり方について（政府の）「五つの安心プラン」では、一定の規制をかけるというような方向感がにじみ出てきているので、規制が一定程度進む可能性はある。だが、今現在、若いお医者さんをどう確保するかということもまた課題である。これはもう本当にいろんな施策を組み合わせていかないといけない。トライアンドエラーの繰り返しだと思うが、高知大学医学部としっかりと連携を取っていくということがまず第一、筆頭である。そのほか、大学に寄附講座を設ける代わりに確実に派遣してくださいという契約を結ぶとか、地域にお医者さんにおいでいただいて、地域をいろいろ見ていただく、この前中村にお一人お医者さんが来られた。このように、ありとあらゆることを組み合わせてやっていくということではないかと思っている。

1.5 車線的整備がモデル事業になったというのは、国がこれを全国に広げていこうということだと思っている。これは、高知県でモデル事業をやるということだが、ただ、高知県の中でモデル事業をやるにせよ、やらないにせよ、本県は県単独ででもこの 1.5 車線的整備というのを進めていこうとしている。どの線に張り付いたということはまだ決まっていないはずだが、単独でも進めていこうとしている。県内でお話がたくさんある中で、どこをやっていくかは優先度を決めてやっていかなければならない。それは全県内にある。

Ｇさん：（どこを整備するかということはまだ）決まってないですね？

知事：具体的にどの線を特に優先でというのは、ある程度は決まっていると思うが、何十か所、何百か所とある話なので、その１本１本の線までは覚えていない。

県から天下りが 68%ということだが、天下りのための天下りではいけないと思う。ただ、実際に人材を供給するということは、過去から県がずっとやってきていることである。人材を供給するという観点からいけば、役に立つ天下りもあると思う。一番いけないのは、権力を利用してポストを作らせるとかいうことである。シルバー人材の活用という観点からも、いろいろ経験した県の人材を有効に活用していただければと思っている。

【空いている学校の使用、生涯学習、教育に必要なもの】

Ｈさん：二つ私はお願いしたい。一つは具体的なこと、教育について。もう一つは私の願望である。

私は黒潮シルバー人材センターで、シルバーのパソコンクラブを作っている。現在会員 29

名である。平成 13 年に政府のＩＴ事業でパソコンを覚えた。そして、どうもこれだけではいけないなということで、17 年９月にクラブを作って、ちょうど３年になる。同好のクラブなので、はっきり言うと、会費は取っているが予算がない。何年前だったか、開かれた学校づくりで、大いに空いている学校の教室、施設等を使いなさいと言われたが、学校の使用がだめということになった。先ほど教育のパンフレットを見せていただき、学校教育については分かったが、前ほど生涯学習のことが言われなくなったのではないかと思っている。現在は県立幡多青少年の家をお借りして、頻繁に講習をやっているが、学校を使わせていただけないか。

私は自衛隊で、26 年間、自衛隊の一番根源となる曹、陸曹・海曹・空曹と、高卒で入ってきた者の教育を、最初は教官の助手として、その後、教官としてやっていた。昔の人はいいことを言うなと感じた。「かわいくば、三つ教えて二つ褒め、一つ叱ってよき人とせよ」、このとおりである。まとめて言うと、私の持論は、教育は、相手を一人前に役立つ人材に何とかして育てていこうという愛情、その次に、日本の教育は自分が持つというような、いわゆるほとばしる情熱、そして、人の教育や、いろいろな勉強から得られる創意であるということである。愛情、熱意、創意が不可欠だと思う。高知県は非常にいいと思う。いいとは思うが、私は愛媛にもいて、大きく違うところは、教育者も生徒も競争心がないというところがあるのではないかと思う。愛媛は大体公立が強い。公立の中学校の先生は、公立のいい高校に何人合格させたかということで、先生の成績が決まる、したがって、先生にも競争があると聞いたことがある。ということで、２点目は私の願望なので、こんなことを言っていたなと覚えておいていただければと思う。１点目に言った学校施設の開放は、何とかお願いできればと思う。

知事：学校施設の活用や、廃校となった小学校の活用は、是非進めていくべき話だろうと思う。パソコン教室の具体的な話については、経緯もおありのようなので、町長さんともよく話をさせていただきたいと思う。

生涯学習については、熱心に取り組んでいきたいと考えている。大学の改革などについても論じていて、組織がどうなるかということは別としても、生涯学習の機能は強化・充実していきたいという思いである。高齢化が進んできていて、大人である時間がすごく長くなっている。その分、一生懸命学び続けるということは極めて重要なことだと思っている。例えば産業振興の話でも、地域地域でお店を経営するにも、ちょっとした経営学の知識などがあるかないかで、大きく違ってくるのではないか思う。そういうことが教えられるような施設、高等教育のあり方の問題としても考えていきたいと思っている。

教育の世界で、教育者も生徒も競争心があるかないか、切磋琢磨の心は必要だろうと思うが、残念ながら、今まで、非常に小規模校が多いという中で、そういう機会に恵まれなかった先生方もいらっしゃる。そういう場づくりを、県としても努力をして進めていかないといけないと思う。また、子どもたちについては、他の友だちと競争するという側面もあるのかもしれないが、単元テストという話を申し上げたように、むしろ自分自身の学習の定着が進んでいくことが励みになっていくような仕組みづくりを進めていく必要があると考えている。そういうことによって、子どもが充実感を得て、学校に行くのが楽しくなるような学校づくりを目指していくことが重要だと思っている。そこから先、大人になってどのように競争心を持てるか、気概というものも、くじけそうになったときに、まずくじけないで、一生懸命勉強したとか、クラ

ブをやったとか、そういう経験が基礎の基礎であると思う。

【家地川ダムの更新、土佐くろしお鉄道の存続、補助金の出し方・各地域間の連携】

Ｉさん：１点目に、家地川ダムのことだが、更新期限が 10 年となっていると記憶している。それだと、あと３年くらいで期限が来る。当時佐賀町は水の問題で、井戸水が枯れるとか、田んぼに水がこないとか、いろいろな意味合いで反対をした経緯がある。もうすぐ 10 年経つが、今まで同様、佐賀の発電所に向けて水を流してくれるものかどうか、また、知事はどういうお考えなのか。

２点目は、くろしお鉄道のことで、「乗って残そう中村線」ということで、一人でも多く汽車に乗って、残してもらおうと頑張った経緯がある。そういう中で、くろしお鉄道も厳しい赤字財政が続いていると聞いている。県が市町村に補助金を出し、その補助金を全額鉄道会社が使うのではなく、そういう市町村への補助金の一部でも、各地域の住民一人一人に恩恵があるように、これは市町村長さんにもお願いだが、やってほしい。例えば、中山間で補助金を出して、花の種を蒔いてきれいにして、他のところから人を呼ぶとか、いろいろなことをしていると思うが、地域地域で、ここにぽつり、あそこにぽつりということでは、なかなか都会の人は高知に足を運んでくれないと思う。補助金も、ばらまき的なものではなく、みんなに還元できるように、佐賀から宿毛まで、市町村の職員も含めて、いろいろな考え方を持っていただいて、一人でも多く他のところから人が来て、そして、その人たちの意見をくみいれられるような体制づくりをしていただきたい。また、各地域でイベントをしていると思うが、そのイベントと組み合わせた大きなスケジュールで各地域で何かをやるというようなことが一番、補助的なものが活きると思う。知事さんの考えはどうか。

知事：家地川ダムの問題については、まだまだよく研究して、勉強してということだと思う。やめるべし、続けるべし、量を変えるべしと、いろいろなご意見があると思う。水の問題は簡単な話ではないと思うので、明快な答弁というのは今はできないが、専門家の会議なども立ち上げさせていただき、そこで研究成果などを踏まえて、妥当な結論を出していく必要があると考えている。あまり過激なことはだめだと思う。

２番目だが、実は私は昨日くろしお鉄道で中村まで来た。今日も夜、くろしお鉄道で帰ることとしている。環境問題などを考えたときに、公共交通の活性化は非常に重要だと思っている。高速道路の整備が進んできた後のありようについては、また議論を呼ぶのかもしれないが、新たに敷設しようというわけではなくて、既にある鉄道なので、徹底的に有効活用していかないといけないと思っている。先日、社長さんとお話させていただいたときには、段々上向いてきているということであった。北川村のモネの庭で４県知事会議があり、くろしお鉄道に４県の知事さんと一緒に乗った。景色の良さなどを絶賛しておられた。こちらの西側もそうである。是非とも有効に使っていくということができればいいと思う。ただし、最後は財政的な問題があり、永続的に赤字がどんどん拡大していくことが確実ということであれば、そのときは廃止の判断をしなければいけなくなるかもしれない。しかし、今、早急に、存続等について考えなければならない状況でないのならば、観光振興や地域振興の取り組みの中でどのように位置付けることができるかを十分考えて、その結果を見てからの判断でいいのではないかと思ってい

る。観光の取り組みについて、おっしゃったように、ぽつりぽつりではなくて、地域間で連携してというお話は私も全くの賛成である。特にこの幡多地域は、首都圏からみると、時間距離で一番日本の中で遠い。観光地としてものすごくいい資源を持っているが、ついでにふらっと行こうというより、かなり覚悟を決めてわざわざあえて行くところである。そうなると、行ってもつまらなかったらどうしようと思うわけである。そこで、いろいろな観光資源を組み合わせて、例えば、四万十川、足摺、柏島、黒潮町というような組み合わせができれば、「これならおもしろそうだ」と思ってもらえて、競争力が高まると思う。そのときに県としては、従来に比べて、もう１歩２歩前に、お金も用意して踏み出していくということが必要ではないかと思う。観光で地域間で連携と言っても、各地域の観光協会同士で調整をしないといけないわけで、そこには明確な旗振り役が必要だと思う。今、国土交通省でも、広域観光圏構想などを作っている。この幡多地域などは正に当てはまると思う。それに向けていろいろご調整もいただいていると思うが、龍馬伝もあることなので、こういう動きをもっと加速させていきたいと思っている。そういうことも産業振興計画の中で今いろいろと考えている。ただ一つ、公共交通機関を観光の中に十分活かしていこうとしたら、どうしても問題となるのは、駅に降りてから先をどうするかという問題である。２次交通というが、タクシー会社さん、バス会社さんなどとの連携が不可欠になってくるので、その体制づくりをしていかなければいけないと思う。

Ｉさん：今は鉄道が走ることについて、地域の人みんなが他人事というような感じでいると思う。しかし、実際にあの鉄道がなくなったときにどういう気持ちになるか。残すためには皆さんのいろいろな考え方があって、そこに夢があるように思う。その夢を育てるために、役職員だけがするのではなくて、みんなが「乗ってこそ」という形に入り込んでいければと思う。先ほども言ったように、鉄道に補助金を出すときに、社員の給料や列車の整備だけに使うのではなく、一部は地域の鉄道の沿線に花を蒔くために使うとか、そういう体制づくりが、他のところから人を呼ぶ環境づくりにつながると思う。補助金はただ出せばいいものではなく、活きた補助金の出し方を考えてほしい。１年でも２年でも中村線が残るように努力していっていただきたい。

知事：ごめん・なはり線は一つ一つの駅にキャラクターがあって、高知市に向けての通勤客も固定客としてつかめたということで、それなりに業績が伸びていると伺っている。こちらも、中村・宿毛間など、通勤・通学で、できるだけみんなで使おうということを盛り上げていただきたいと思う。補助金を団体にうんぬんかんぬんということよりも、私は、地域で観光資源をもっと発掘して、さらにそれを連携して結び付けていくということが高知の観光の発展の基礎の基礎だと思っている。それを推進するための補助金である。何でもかんでもお金を使うということは、残念ながら今の財政状況ではできない。効果的なところにお金を集中的に使うということしかできない。振興に役立つような形でのお金の使い方を何が何でも考えないといけないということは、おっしゃるとおりだと思う。

司会：くろしお鉄道の関係では、今、Ｉさんがおっしゃったようなことが言われている。高知西南地域公共交通協議会というものを立ち上げて、国の補助等もいただいて、20 年度いっぱいで、どのようにくろしお鉄道などを伸ばしていくかという調査をして、計画を策定することとして

いる。

Ｉさん：地域づくり支援課の岡村さんが今日私のところに来てくれて、いろいろなことを要望している。是非知事さんに伝えてくれと言っているので、またよろしくお願いします。

【佐賀温泉を道の駅に、国道の草刈】

Ｊさん：佐賀温泉は、私たち 33 名の者が昭和 51 年から経営している。当初はよかったが、最近の経済の状態で極端にお客が減り非常に経営に苦心している。今日は町会議員の方々も、町長もおいでているので、真剣に取り組んでもらいたい問題がある。佐賀の方で、２年くらい前から、町づくり事業というので、道の駅をやろうかと、そういう申請をするという状況になっている。ところが、道の駅に正式に開業されると、佐賀温泉は１か月ももたない。佐賀の北部の地域の住民の方々に、佐賀温泉を法事とか、小さいおきゃくなどで利用してもらっている。北部の方は、農協もなくなっているので、非常に危機感を持っている。それで、考えていただきたいのは、新しい道の駅をつくらないで、佐賀温泉を町に買い上げていただいて道の駅にしてもらいたい。宿泊も温泉もあるので、変わった道の駅をつくっていただいたらどうか。これは私たちも佐賀温泉の株主も役員も皆そういう考え方である。窪川の松葉川温泉は、個人がやっていたのを農協が１～２年やって、農協もできなくなって、町が９億 5,000 万の資金を投じて買い上げて、温泉を掘り直し、ホテルも建て替えて、町の観光施設として使っている。赤字にもなっていないようである。経営は私たちの方でやるので、お願いしたい。知事さんも道の駅にするということであれば、町も県も国土交通省に陳情に行ったりといったことがいろいろあると思うが、是非これを実現させていただきたい。

**　もう一つ、中村から十和に上がるのに、国道（56 号）のガードレールが大草である。今までは夏に２回くらい刈っていた。今は全然刈らないが管理費が出ないようになったのか。あの道路の草を刈るくらいの管理費が出ないというのはおかしいと思う。知事さんから国土交通省にはっぱをかければどうかと思う。**

町長：佐賀温泉の件は知事も答えようがないと思う。知事は日ごろから黒潮町が物事を決めて、住民のために進めていくことは県も協力すると言ってくださっている。その件は、我々の方でまた議論をしなければいけないと思っているので、その点はご容赦いただきたい。

知事：地域の産物を売り込んでいくようなところがどんどんできていくといいと思う。ただし、それが食い合ってだめになってしまってはいけない。ただ、そのお考えに対して、別のご意見がある方がいるのかどうかも私は全然分からないので、十分調整して、町でよくプランを練っていただいてから、進めるべきだという話であれば私も努力をしたいと思う。

【分かりやすい説明による住民参加】

Ｈさん：町がやる懇談会もそうだが、なかなか住民の参画意識がないというか、参加が少ない。例えば、町の各地区の懇談会をしても、町の職員、執行部が多いのではないかというような非常に失礼な場合がある。今日いただいた教育の緊急教育プランのパンフレットは非常に分かり

やすい。住民には、あまり細かいことではなく、分かりやすい言葉によって、できるだけ住民を参加させるということが必要で、それが来たるべき、地震・津波（への備えなど）にもつながってくるのではないかと思う。

知事：はい。

司会（黒潮町総務課長）：今Ｈさんが言われたことは、県、町を問わず、行政が問われていることだと思うので、行政としても、そういう方向で頑張っていきたいと考えている。

（会場の方からのご意見等）

【工業の振興、高速道路の早期延伸】

Ｋさん：町会議員のＫです。平成 17 年の国勢調査から判断して、黒潮町はあと７年で高齢化率が 50%を超えると思う。なぜそういうことになったかというと、私が考えるに、とにかく働く場がないということだと思う。町はこの間総合振興計画をつくったが、住民の声を聞くと、雇用の場の創出が第一である。合併する前からも佐賀町においてはその声が一番強く、合併協の中でも働く場の創出ということが計画に位置付けされている。昭和 50 年代半ばに、高知県の西南開発局が高知県西南開発計画をつくってくれた。その中身は、要するに働く場をつくるということが究極の目的で、それによって、人を定着させるという計画だった。その当時は、県民一人当たりの所得水準は 46 番目ではなく、８番、９番くらい、今より上にあった。そのころに、岩手県は下から２番目くらいの県民一人当たりの所得水準だった。現在は、岩手県は高知県を遥かに抜き去り、当時の高知県の水準に達している。高知県はその当時の岩手県の水準まで下がってきた。理由はいろいろあると思うが、一つはやはり工業の導入が進んだということで、岩手県では、新幹線、自動車専用道路、空港、港が大変整備されている。高知県はそれがほとんどできていない。企業を呼ぶにしても、インターの近くということが重要な要素となって、企業誘致が難しい。県の工業の状態をみると、西南地域には二つの団地だけだが、高知市近辺にはたくさん団地がある。人口が集中しているということは分かるが、県は県中心部に目を向けているというように受け取れる。というのは、昔、幡多には部長級の幡多事務所所長さんがいた。交通の便が良くなったということで、いつの間にか所長がいなくなってしまって、全体の士気が低下したのではないかと、こちらは考えるわけである。もう一つ、高速道路について、今、日程的に分かっているのが、25 年に窪川町平串、25 年ごろに片坂バイパスで、それ以外について、佐賀まではいつという数字が全然入っていない。佐賀から中村まで、一切そういうものが明記されていない。大変遅れている。全力でやっていただかないと、あと７年経つと、高齢化率が 50%を遥かに上回る可能性も出てくる。是非高知県西部に対して今以上のご支援をいただきたい。

知事：とにかく働く場の確保をしたいということで、今、産業振興計画というものをつくらせていただいていて、その中で地域別の取り組みも検討させていただいている。今おっしゃった経済についての実感は、私も本当にそう思う。昔はもっと良かったが、今は本当に残念な状態になってしまっているので、これを何とかしていかなければならないと思っている。経済が厳し

いときに一番困るのは、高齢者の方や障害者の方などの、どちらかと言うと苦労をしておられる方々が余計苦労することになるわけで、それをどうするか、本当に考えていかなければならないと思う。工業については、高知県は46位で、しかも45位の鳥取県の半分ということで、ずば抜けて遅れている。企業誘致も引き続き進めているが、強みと弱みが一つずつあって、強みは、アフターサービスなどソフト面がいいということで、ヤフーもこの間来てくれた。だが、補助金や税金を減免するといったことで、戦おうとすると、どうしても他県に力負けをする。なので、例えば、工程１、２、３とあるときに、１と３は既に県内にあるが、２がないというようなもので、来ていただければ効率的にできるといったものにターゲットを絞ってやっていく。県内には団地が足りない状況なので、決して高知市周辺だけに目を向けているというわけではない。この前も宿毛に大きい造船所が来た。東部も西部も中央部も大切だと思っている。

道は、８の字ルートの完成に向けて、秋以降に戦いが起こるだろうと思っているので、国政、県政、市長県政の三位一体で戦っていかなければいけないと思う。道路整備については、国のコスト・ベネフィット計算をクリアしないと道路がつかない。その計算方法から変えさせようとして、今働きかけている。頑張っていきたいと思う。

【１次産業の振興】

Ｌさん：私はいくら高知が頑張っても今の46位を30位にするということはできないと思う。しかし、高知が何で勝てるかといえば、１次産業の食料生産だったら勝てると思う。食料の問題はもう４～５年したら、日本に出てくると思う。自分たちは、人間が生きていく上で、なければならない食料を作っている。その食料を作って、その食料を作っている生産者がそれだけで食べていけないという仕組みに問題があると思う。加工しないといけないということは、自分はタタキもやったが、私はけしからんことだと思う。今の高知の１次産業、食料生産に対する取り組みが、こんなことだったら、高知にいてももうだめだなという思いを持っている。頑張るところは、高知の地場産業の１次産業、食料生産の産業を元気にすることではないか。

知事：私は最初にも申し上げたように、まず１次産業だと考えている。その１次産業の足元がだめになりつつあるので、足元を固め直すと申し上げた。全く同じ考えである。ただ、その上でなお、いろいろ産地の競争が激化してきているなどということを考えたときに、新しいことにも取り組まないといけないのではないかということである。今、タタキがとおっしゃったが、そのタタキが、全国で、北海道も沖縄も抜かして全国で１番の評価を得た。素晴らしいではないですか。１次産業があって、それから派生したものだということにしていけば、浮き足のような足が地についていないということにはならないのではないかと思っている。

Ｌさん：タタキを評価してもらうことはありがたいことだが、そのことによって、高知の漁業が元気になっているのであれば、こんなことは言わない。だが、結果がそうではないので言わせていただいた。

【教育改革】

Ｍさん：高知県の教育革命ということで、知事が言われているが、成績が低いからそのことに力

を入れるということが革命ではないと思う。学校教育の現場の革命を起こしていただきたい。これだけ子どもが減ってきて、統合される小学校がある中で、おそらく教師も余ってきていると思う。小学校で教師を増やして、教壇に立つ先生が１名、生徒のところを回る先生が１名にして、先生の言うことをきちんと書けているか、間違った字を書いていないか見る先生を配置できないか。それと、今度新規に建て直す学校は、先生が１時間終わるたびに職員室に帰るのではなく、一角に部屋を作って先生一人がいるようにすれば、悩みのある生徒が相談に行きやすい。これからの高知県の教育は全国の手本となるような、学力を上げる現場に切り替えてほしい。

知事：正にそれをやろうとしている。パンフレットに「学校・学級改革」とあるが、ここをご覧いただきたい。生活指導上の課題が多くて、担任の先生がすごく忙しいという状況がある。なので、担任の先生だけもっと頑張れと言っても、現実問題としてうまくいかないということがあろうかと思う。担任の先生をチームとしてバックアップしていくような体制を作ることが現実的ではないかという判断で、「学力向上のための校内体制の整備」を行い、学力向上専従担当教員の配置や教員ＯＢの派遣による授業指導等のチームを特に課題のある学校に置いていくということをやろうと考えているところである。

もう一つ、職員室の話について言えば、確かにそういうのはおもしろいかもしれない。一つの考えだと思う。

Ｍさん：新規に建て替えるときに、小学生は３年まで、４年生から小中一貫校、こういう教育の改革をしてもらわないと、教師の頭の改革にもならないと思う。ものすごくプライドを持っているので、教師は。そういうことを特に県政の中で議論していただいて、市町村を指導していただきたいという考えである。

知事：よくいろいろ研究をしてみたいと思う。小中一貫校には、いろいろ課題もあると思う。メリットもデメリットもある。子どものことなので、よく議論も必要だと思う。

（知事のまとめ）

長時間誠にありがとうございました。３時間半近くにわたって皆様からお話を伺わせていただくことができた。道路のお話、地域振興のお話、１次産業のお話もいただいた。我々がやらなければならないことは、今県が持っている強みというのを十分に活かしきることだと思う。

今日いただいたご意見については、個人情報に配慮して、情報として県庁の中で共有させていただきたいと考えている。その上で、今後のいろいろな県政運営にも活かさせていただく。

今日、十分お答えできなかったことなどについては、後ほどご説明に伺う、あるいは、状況を教えていただくということもさせていただきたいと考えている。

今非常に厳しい状況だが、希望を捨てずに頑張っていくことが必要である。一生懸命頑張っていくので、ご指導ご鞭撻を今後ともどうぞよろしくお願いします。本日は本当にありがとうございました。